



⑧「実データ・実課題(学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3	授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3
データサイエンス基礎	2	○	○	○	○						

⑨ 選択「4. オプション」の内容を含む授業科目

授業科目	選択項目	授業科目	選択項目

⑩ プログラムを構成する授業の内容

授業に含まれている内容・要素		講義内容	
(1) 現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている	1-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビッグデータ、AI、データ量の増加、Society 5.0、データを起点としたものの見方「データサイエンス基礎」(第1回目「オリエンテーション:データサイエンスとは」)</li> <li>・Society5.0、第4次産業革命、複数技術を組み合わせたAIサービス「データサイエンス基礎」(第5回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(4)各専門分野での活用事例」)</li> </ul>	
	1-6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・AI等を活用した新しいビジネスモデル(商品のレコメンデーション)「データサイエンス基礎」(第1回目「オリエンテーション:データサイエンスとは」)</li> <li>・AI最新技術の活用例(強化学習)「データサイエンス基礎」(第14回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(5)まとめ、データサイエンスの応用事例」)</li> </ul>	
(2)「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの	1-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査データ、人の行動ログデータ「データサイエンス基礎」(第1回目「オリエンテーション:データサイエンスとは」)</li> <li>・1次データ、2次データ、データのオープン化「データサイエンス基礎」(第2回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(1)データの集め方、データの利用」)</li> <li>・調査データ「データサイエンス基礎」(第8回目「データを読む(1)データの種類、代表値、分散」)</li> <li>・調査データ「データサイエンス基礎」(第9回目「データを読む(2)母集団と標本抽出、アンケート調査」)</li> <li>・実験データ「データサイエンス基礎」(第11回目「データを扱う(1) Excelによる記述統計」)</li> <li>・調査データ「データサイエンス基礎」(第12回目「データを扱う(2) Excelによるクロス集計」)</li> <li>・調査データ「データサイエンス基礎」(第13回目「データを扱う(3) 相関分析・散布図」)</li> </ul>	
		1-3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ・AI活用領域の広がり(消費)「データサイエンス基礎」(第1回目「オリエンテーション:データサイエンスとは」)</li> <li>・データ・AI活用領域の広がり(防災を例に)、判断支援(防災を例に)「データサイエンス基礎」(第2回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(1)データの集め方、データの利用」)</li> </ul>
		1-4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ解析:シミュレーション、データ可視化:リアルタイム可視化、地図上の可視化「データサイエンス基礎」(第3回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(2)データ・AI利活用のための技術」)</li> </ul>
(3) 様々なデータ利活用の現場におけるデータ活用事例が示され、様々な適用領域(流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)の知見と組み合わせることで価値を創出するもの	1-5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ・AI利活用事例紹介(公共、ヘルスケアを中心に)「データサイエンス基礎」(第5回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(4)各専門分野での活用事例」)</li> <li>・データ・AI利活用事例紹介(教育)「データサイエンス基礎」(第6回目「教育におけるデータサイエンス(1) データ活用事例」)</li> <li>・データ・AI利活用事例紹介(健康、サービス産業)「データサイエンス基礎」(第14回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(5)まとめ、データサイエンスの応用事例」)</li> </ul>	

(4) 活用に当たっての様々な留意事項 (ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする	3-1	・プライバシー保護「データサイエンス基礎」(第4回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(3)AIリテラシー」) ・個人情報保護、EU一般データ保護規則(GDPR)、忘れられる権利、データ倫理:データのねつ造、改ざん、盗用、プライバシー保護「データサイエンス基礎」(第7回目「教育におけるデータサイエンス(2)個人情報、情報セキュリティ」)
	3-2	・情報漏洩等によるセキュリティ事故の事例紹介「データサイエンス基礎」(第4回目「現代社会におけるデータ・AIの利活用(3)AIリテラシー」) ・情報セキュリティ:機密性、完全性、可用性、匿名加工情報、暗号化、パスワード、情報漏洩等によるセキュリティ事故の事例紹介「データサイエンス基礎」(第7回目「教育におけるデータサイエンス(2)個人情報、情報セキュリティ」)
(5) 実データ・実課題(学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの	2-1	・データの種類(量的変数、質的変数)、代表値(平均値、中央値、最頻値)、データのばらつき(分散、標準偏差)「データサイエンス基礎」(第8回目「データを読む(1)データの種類、代表値、分散」) ・母集団と標本抽出(国勢調査、アンケート調査、全数調査、単純無作為抽出、層別抽出、多段抽出)、統計情報の正しい理解(誇張表現に惑わされない)「データサイエンス基礎」(第9回目「データを読む(2)母集団と標本抽出、アンケート調査」)
	2-2	・データ表現(棒グラフ、折線グラフ)「データサイエンス基礎」(第10回目「データを説明する～データ図表表現」)
	2-3	・データの集計(和、平均)、データ解析ツール(スプレッドシート)「データサイエンス基礎」(第11回目「データを扱う(1) Excelによる記述統計」) ・データの集計(平均)、データ解析ツール(スプレッドシート)「データサイエンス基礎」(第12回目「データを扱う(2) Excelによるクロス集計」) ・データ解析ツール(スプレッドシート)「データサイエンス基礎」(第13回目「データを扱う(3) 相関分析・散布図」)

⑪ プログラムの学修成果(学生等が身に付けられる能力等)

1) 数理・データサイエンス・AIに関する基礎的な理解 2) データ・情報の検索、収集に必要な基礎的なスキル 3) データ・情報の基礎的な可視化スキル 4) データ・情報から価値を読み取る基礎的なスキル 5) データ・情報の活用にあたっての基礎的な留意点や倫理観 6) 誰一人取り残さない社会(SDGs)の実現化に必要なAI技術に関する基礎的な理解 7) 学科専門領域におけるデータサイエンス活用への橋渡し
---



大学等名

教育の質・履修者数を向上させるための体制・計画について

① 全学の教員数 (常勤)  人 (非常勤)  人

② プログラムの授業を教えている教員数  人

③ プログラムの運営責任者  
 (責任者名)  (役職名)

④ プログラムを改善・進化させるための体制(委員会・組織等)  
  
 (責任者名)  (役職名)

⑤ プログラムを改善・進化させるための体制を定める規則名称

⑥ 体制の目的

⑦ 具体的な構成員

⑧ 履修者数・履修率の向上に向けた計画 ※様式1の「履修必須の有無」で「計画がある」としている場合は詳細について記載すること

令和4年度実績	1%	令和5年度予定	4%	令和6年度予定	15%
令和7年度予定	41%	令和8年度予定	66%	収容定員(名)	6,172

具体的な計画

令和4年度より開設された東京家政大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム(MDACK)の基幹科目である「データサイエンス基礎」は、全学部・全学科の1年次学生が受講可能としており、その履修率の向上に向けては以下2点の取組を実施している。

① 広報・周知

本科目は全学部1年生を対象とした選択科目として開講をしているため、新1年生向けガイダンス内で継続的に取り上げるにより、認知度向上と履修希望者増を図っている。また、ポータルシステムやチラシ・ポスター・ホームページ等を活用した広報活動を展開している。

② カリキュラム変更

本プログラムは教職課程での要望及び社会的要望を踏まえ、令和6年度からは教職必修科目(対象者約700名)、令和7年度より全学必修科目(対象者約1,600名)にカリキュラムを改訂する中期計画を立案している。これらの計画に基づき、学内の教学支援体制を整備中である。

上記の実施により、計画に沿った履修率を実現するとともに、令和7年度以降は学年進行に伴い履修率100%を実現できることとなる。

⑨ 学部・学科に関係なく希望する学生全員が受講可能となるような必要な体制・取組等

「全学データサイエンス教育推進委員会」と「共通教育推進部」を中心に2キャンパス内全ての学部・学科および教学組織と連携し、全学を通じたMDACK教育プログラムの学修支援体制を実施している。

キャンパス横断・学問領域横断科目「データサイエンス基礎」は、すべての講義構成(14回分)をフルオンデマンド形式のメディア授業科目とし、学生がいつでも・どこからでも履修できる環境を構築している。また、開講時期を夏期休業期間中の集中講義とすることで、履修登録上も全ての学部・学科の1年次学生が履修可能な設計となっている。

なお、令和4年度より本学入学の学生にはノートPC携帯を義務付けており、「データサイエンス基礎」はノートPC必携講義内容として位置づけられているため、新1年生の学修形式に対応している。

開講コマ数に関しては中期計画に基づき令和4～6年度にかけて段階的に増加し、令和7年度には全学必修となり、必ず受講する体制となる。

⑩ できる限り多くの学生が履修できるような具体的な周知方法・取組

本学のホームページ(HP)や学生用のポータルサイト上で「東京家政大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム(MDACK)」およびプログラム基幹科目「データサイエンス基礎」に関する情報(科目紹介動画も含む)を公開し、キャンパスを問わず全学生がMDACK教育プログラムについての情報を得やすい環境を整えている。また、両キャンパス新入生へチラシを配布し、MDACK教育プログラムと「データサイエンス基礎」に関する情報の周知に努めている。令和5～6年度は同様に取組み、令和7年度以降「データサイエンス基礎」の全学部・学科必修科目化に伴い、新たに全学共通教育用のパンフレットによる情報周知を実施する。

また、プログラム修了者に対して身に付けられる具体的な知識と技能を明示するデジタル修了証(オープンバッジ)を発行する本学独自の認定を実施している。この制度により、修了者は自身の獲得スキルを把握・開示しやすくなり学修促進に繋がると期待される。

⑪ できる限り多くの学生が履修・修得できるようなサポート体制

PC使用が前提の科目であり、令和4年度より本学入学の学生はノートPC必携を義務付けているため、学修形式は対応している。また、自習等でスポット的にPCが必要となる学生に対して板橋校舎ではPC自習室、PCロッカー、狭山校舎では図書館にて貸し出しPCを用意しており、学生のPCサポートを実施している。

授業担当者が作成した教材は、LMS(manaba)で共有しており、いつでも閲覧が可能な環境を構築している。また、受講生の履修状況、課題提出などをLMS(manaba等)上で一括して管理し、教員が受講生の進捗・理解度・習熟度を的確に把握することにより、それぞれの受講生に応じた適切な指導が可能となっている。

また、manaba等のシステムに関する疑問に対しても学修・教育開発センターに問い合わせ窓口を設けており、学生のサポートを行う体制を構築している。

⑫ 授業時間内外で学習指導、質問を受け付ける具体的な仕組み

学習指導については、LMS(manaba)の「個別指導コレクション機能」、Microsoft「Teams」等の外部ツールも活用し、学生は随時不明点等をシステムを通じて確認することができ、投稿された質問は担当教員が確認し、原則24時間以内に返答する体制を整備している。これには各種システムを通じてICT活用の習熟度を向上する狙いも含まれている。

また、担当教員のオフィスアワーを活用し、対面による質問も随時受け付けているほか、manaba等のシステムは学修・教育開発センターにメールを含む問い合わせ窓口を設けており、いつでも学生のサポートを行う体制を構築している。

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

全学データサイエンス教育推進委員会

(責任者名) 大西 淳之

(役職名) 委員長(兼共通教育推進部長)

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	履修データはシステムを通じIR部門「学修・教育開発センター」にて集約・把握している。学生の授業進度や課題提出状況・質問などはLMSで教員がモニタリングし、適切に介入し授業支援を実施している。令和4年度の履修・修得状況は以下の通り。 ・プログラム履修状況 当初50名程度の想定としていたが、応募多数に伴い80名受講枠へ拡大した。全学部より応募があり、広報成果として一定の認知度も獲得できたと評価できる。 ・単位修得状況 プログラム受講者79名に対し、単位取得者は72名(秀51名(70%)、優17名(24%)、良2名(3%)、可3名(3%))であり、リテラシーレベルの内容として概ね適切な成績評価と単位認定が行われたと判断できる。
学修成果	「全学データサイエンス教育推進委員会」と「学修・教育開発センター」協同で修了生の成績分析を通じ、学修成果およびスキル習得の質保証を図る体制を構築している。今後は修了生の関連専門科目の学修成果との結びつきを追跡し、在学期間全体を通じての学修成果可視化を図ることとしている。 プログラム学修成果はHP等にて公表し、周知に努めている。目標の習熟度は毎回小テスト等により確認し、成績評価で内容理解・復習する観点を重視することで学修成果の定着を図った。 授業終了後には2種のアンケートにて理解度等を分析し、プログラム取組の適切性を図っている。アンケート結果については担当者間で共有し、次年度以降の改善検討に用いている。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本学では、全科目に対して授業アンケートを実施している。このアンケート回答結果から各科目に対する受講生の内容理解度を把握している。本プログラムの修了生に対しては、さらに独自のアンケートを実施し、プログラム基幹科目「データサイエンス基礎」に対する理解度、メディア授業の効果、サポート体制についての満足度などについて調査し、次年度以降のプログラム改善に繋げることとしている。 令和4年度は履修者79名に対し、授業アンケートは51名、独自アンケートは55名から回答を得られ、「授業の到達目標の達成度を達成(ほぼ達成)できた」、「授業の内容を理解(ほぼ理解)できた」の回答率の合計が90%以上となっている。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	令和4年度「データサイエンス基礎」授業評価アンケート結果では、上記の通り達成度・理解度について学生から高い評価を得ているため、口コミでの推奨が期待できる。また、このようなアンケート結果はHPより教職員学生向けに公開を行うことから、新入生を含めて今後科目を履修する学生が確認可能となる。また修了生にはヒアリングを実施し、受講満足度や後輩への推奨度が高い旨のコメントを得ている。 後輩等他の学生への推奨度を測定するアンケートは実施していないため、今後は項目の見直し等を検討する。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	「全学データサイエンス教育推進委員会」が中心となり共通教育推進部と協同で、「データサイエンス基礎」の履修状況の分析、履修率向上に向けた次年度計画の立案、進捗状況の管理を実施する。併せて毎年、本学HPやガイドブック、チラシなどによる新入生向けの広報の実施、分かりやすい「データサイエンス基礎」の科目紹介および履修登録方法に関する動画の更新を行う。各種取り組みを経て、履修希望者の変動をR5年度以降の検証により確認する。なお、令和6年度は小・中・高教職課程希望者必修とすることで約700名、令和7年度には全学必修化により約1600名が履修対象となるため、学年進行に伴い履修率100%となる。



自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本学の全学的なMDACK教育プログラムが開設されたのは令和4年度(2022年度)であるため、本プログラム修了者の卒業生は現時点ではない。そのためこの項目に関しては今後の取り組みとなる。</p> <p>本学の取組みとして卒業時アンケートおよび採用先ニーズ調査にて卒業生の実態を把握しているため、本プログラム修了生の枠組みでの分析も検討する。</p> <p>本学では毎年「キャリア支援センター」が卒業生の就職先を対象に、企業からみた本学卒業生に対するアンケートを実施している。回答のうちデータサイエンス関連スキルについて分析を実施し、その結果をもとにMDACK教育プログラムで習得させるべき具体的なスキルの洗い出しと「データサイエンス基礎」科目の内容の点検・評価・改善に努める。</p> <p>また、担当教員として民間企業出身の実務家教員も配置し、さらに産業界出身の本学教員にもゲストスピーカーとして参画を求めることで、産業界からの視点を含めた教育プログラムを実施している。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>「データサイエンス基礎」は14回の講義を3人の専任教員が単元毎に担当し、毎回オリジナルの講義内容を動画配信している。</p> <p>講義は「データサイエンスが本学すべての学部・学科の学問領域に通底する知識体系である」点や、そもそものデータサイエンスの概念等を最初に丁寧に説明することで、受講生が「データサイエンス基礎」の学修と各学科における専門教育とのつながりや学ぶことの意義を実感できるカリキュラムとしている。</p> <p>さらにデータサイエンス初学者であっても、実社会における産業界や研究面での具体的な活用事例を高品質な動画教材で提供・紹介することで、本科目の学ぶ楽しさを実感できる設計となっている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>本学では全開講科目に対して授業評価アンケートを実施しており、学生の理解度と学修到達度を把握することで授業内容の一定水準を維持している。併せて授業改善に繋がる課題点の抽出と次年度に向けた善後策の検討を行っている。</p> <p>また、学修教育開発センターが主催する全学FD研修会(毎年、複数回の実施)を通して「教授法」、「評価法」、「単位の質保証」などの向上に努めている。</p> <p>また本科目担当教員の中には「オンデマンド授業の心理的効果」や「メディア授業教材」に関する研究をしている者もあり、その研究成果はFDとして学内に公開するとともに、本科目の分かりやすい授業設計に活用されている。</p>

年度	2022																								
開講学科・専攻	2022(R4)児童学専攻カリキュラム 2022(R4)育児支援専攻カリキュラム 2022(R4)児童教育学科カリキュラム 2022(R4)栄養学科カリキュラム 2022(R4)管理栄養学科カリキュラム 2022(R4)服飾美術学科カリキュラム 2022(R4)環境教育学科カリキュラム 2022(R4)造形表現学科カリキュラム 2022(R4)英語コミュニケーション学科カリキュラム 2022(R4)心理カウンセリング学科カリキュラム 2022(R4)教育福祉学科カリキュラム 2022(R4)看護学科カリキュラム 2022(R4)作業療法学専攻カリキュラム 2022(R4)理学療法学専攻カリキュラム 2022(R4)子ども支援学科カリキュラム																								
講義期間	集中																								
単位数	2																								
授業形態	演習																								
講義コード	1193																								
授業科目名	データサイエンス基礎																								
授業担当者氏名	天野美穂子(アマノ ミホコ) 小池新(コイケ アラタ) 新関隆(ニイゼキ タカシ)																								
授業の到達目標 (ディプロマポリシーとの関連)	(1)データサイエンスに関する基礎的な概念を理解し、社会における実際のデータ・課題を適切に読み解くことができる。(導入) (2)データを利活用する上で必要な倫理面での留意事項を理解することができる。(心得) (3)データの基礎的な分析方法を知り、活用することができる。(基礎)																								
授業概要	「データサイエンス」は、データから有益な情報・知見を引き出す学問分野です。現代社会では、この「データサイエンス」の視点・技術が、課題解決や新しい価値の創造に活かされています。この授業では、「データサイエンス」の視点を活用し、社会におけるさまざまな事象を適切に読み解く力を身につけ、さらには、「答のない課題」に対して最善な解につながる思考力や解決力を養うことを目指します。 授業は、(1)現代社会におけるデータ・AIの利活用(導入)、(2)データ・AIを利活用する上での倫理面での留意事項(心得)、(3)データの分析(基礎)、の大きく3つの内容で構成されています。これら3つに関して、「各学部・学科の専門分野」や「教育」とのつながりを意識しながら、「講義」(主に(1)と(2))、「Excelを使用した演習」(主に(3))、の双方の形式によって学んでいきます。																								
教育課程内の位置づけ	共通教育科目 情報関連科目 1年 選択科目																								
授業におけるアクティブな特徴	<table border="1"> <thead> <tr> <th>特徴</th> <th>該当</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A: 課題解決型学習(PBL)企業、自治体等との連携あり</td> <td></td> </tr> <tr> <td>B: 課題解決型学習(PBL)連携なし</td> <td></td> </tr> <tr> <td>C: 討議(ディスカッション、ディベート等)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>D: グループワーク</td> <td></td> </tr> <tr> <td>E: プレゼンテーション</td> <td></td> </tr> <tr> <td>F: 実習、フィールドワーク</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>G: 双方向授業(ICT活用なし:対話型、リアクションペーパー等)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>H: 双方向授業(ICT活用あり:クリッカー、manaba等)</td> <td>○</td> </tr> <tr> <td>I: 反転授業</td> <td></td> </tr> <tr> <td>J: 外国語のみで行われる授業</td> <td></td> </tr> <tr> <td>K: オープンな教育リソース(JMOOC・edX・Coursera等)を利用した授業</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	特徴	該当	A: 課題解決型学習(PBL)企業、自治体等との連携あり		B: 課題解決型学習(PBL)連携なし		C: 討議(ディスカッション、ディベート等)		D: グループワーク		E: プレゼンテーション		F: 実習、フィールドワーク	○	G: 双方向授業(ICT活用なし:対話型、リアクションペーパー等)		H: 双方向授業(ICT活用あり:クリッカー、manaba等)	○	I: 反転授業		J: 外国語のみで行われる授業		K: オープンな教育リソース(JMOOC・edX・Coursera等)を利用した授業	
特徴	該当																								
A: 課題解決型学習(PBL)企業、自治体等との連携あり																									
B: 課題解決型学習(PBL)連携なし																									
C: 討議(ディスカッション、ディベート等)																									
D: グループワーク																									
E: プレゼンテーション																									
F: 実習、フィールドワーク	○																								
G: 双方向授業(ICT活用なし:対話型、リアクションペーパー等)																									
H: 双方向授業(ICT活用あり:クリッカー、manaba等)	○																								
I: 反転授業																									
J: 外国語のみで行われる授業																									
K: オープンな教育リソース(JMOOC・edX・Coursera等)を利用した授業																									
実施形態	<p>メディア授業科目(オンデマンド配信)</p> <p>※ 本学では、授業科目を以下のとおり分類しています。</p> <p>対面授業科目 : 授業回数の全部あるいは授業回数半数以上を対面で行う授業科目 メディア授業科目 : 上記「対面授業科目」以外で、主にメディアで行う授業科目</p> <p>※ 上記実施形態と異なる授業回がある場合は、以下「授業計画」欄に記載しています。</p> <p>※ 新型コロナウイルス感染症の状況により、変更となる可能性があります。 変更の場合はmanaba等で連絡します。</p> <table border="1"> <tr> <td>第1回</td> <td>オリエンテーション:データサイエンスとは (担当:天野・小池・新関)</td> </tr> </table>	第1回	オリエンテーション:データサイエンスとは (担当:天野・小池・新関)																						
第1回	オリエンテーション:データサイエンスとは (担当:天野・小池・新関)																								

<b>授業計画</b>	第2回	現代社会におけるデータ・AIの利活用(1)データの集め方、データの利用 (担当:新関)
	第3回	現代社会におけるデータ・AIの利活用(2)データ・AI利活用のための技術 (担当:新関)
	第4回	現代社会におけるデータ・AIの利活用(3)AIリテラシー (担当:新関)
	第5回	現代社会におけるデータ・AIの利活用(4)各専門分野での活用事例 (担当:新関)
	第6回	教育におけるデータサイエンス(1) データ活用事例 (担当:天野)
	第7回	教育におけるデータサイエンス(2) 個人情報、情報セキュリティ (担当:天野)
	第8回	データを読む(1)データの種類、代表値、分散 (担当:天野)
	第9回	データを読む(2)母集団と標本抽出、アンケート調査 (担当:天野)
	第10回	データを説明する～データ図表表現 (担当:小池)
	第11回	データを扱う(1) Excelによる記述統計 (担当:小池)
	第12回	データを扱う(2) Excelによるクロス集計 (担当:小池)
	第13回	データを扱う(3) 相関分析・散布図 (担当:小池)
	第14回	現代社会におけるデータ・AIの利活用(5)まとめ、データサイエンスの応用事例 (担当:天野・小池・新関)
	<b>授業外学修 予習(事前学修)</b>	各授業
[平均60分]		
<b>授業外学修 復習(事後学修)</b>	各授業	各回の課題、および、授業内で理解が不十分であった箇所の復習
	[平均60分]	

<p><b>評価方法</b></p>	<p>各回の課題・小テスト(80%)、授業への取り組み・態度(20%)</p>
<p><b>教科書等</b></p>	<p>教科書:なし。必要に応じて資料を配布します。 参考書:北川源四郎・竹村彰通(編)『データサイエンス入門シリーズ 教養としてのデータサイエンス』, 2021, 講談社.</p>
<p><b>課題に対する フィードバックの方法</b></p>	<p>授業内で実施した課題について、必要に応じて解説を行います。</p>
<p><b>その他</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開講期間は8月22日(月)～9月7日(水)の予定です。</li> <li>・講義開始日に、全14回分の動画を公開します。受講にあたってのモデルスケジュールをmanabaに掲載するので、それを参考に計画的に学修を進めましょう。</li> </ul>
<p><b>授業担当者の 実務経験の有無</b></p>	<p>実務経験あり</p>
<p><b>「授業担当者の実務経験 の内容」および 「実務経験を活かした授 業内容」</b></p>	<p>小池:NTT研究所における情報ネットワークの研究、データ分析及び情報システムの開発を経験した教員がデータサイエンスの基礎について解説を行う。</p>

令和4年度の「認定教育プログラム」が全学部等が開講されていたことが分かる資料-1  
2022年度「学生便覧」家政学部 栄養学部 人文学部

共通教育科目

〈表記について〉

1. 単位数欄の数字のみは講義、[ ]は演習、( )は実験・実習及び実技を示す（p.i-47参照）。
2. 標準開設年次欄の○は通年開講科目、○は前期または後期開講科目、◇はクラスによって開講期が異なる科目。
3. 他学年履修が可能な学年は、標準開設年次欄に□で示してある。ただし、履修人数等の関係で許可されない場合もある。
4. 他学年履修が可能な科目は、他学科欄に●で示してある。ただし、履修人数等の関係で許可されない場合もある。
5. 備考欄の「留学生のみ」の科目は外国人留学生等のための特別科目なので、それ以外の学生は履修できない。
6. 備考欄の※の科目は、ポイント制の科目である。

〈履修方法について〉

1. 共通教育科目は、必修科目・選択科目を合わせて24単位以上修得する。
2. 共通教育科目及び専門教育科目を含めて124単位以上修得する。
3. 共通教育科目は、必修科目を除き、履修人数が5人以下の場合、当該年度の授業は原則として開講しない。
4. 人間教育基礎科目から4単位以上、人間教育演習科目から2単位以上修得する。
5. 人間教育基礎科目・人間教育演習科目については、履修人数制限があるため、履修登録時に抽選方式を採用する。そのため、希望していても履修できないこともある。
6. 言語文化科目で自分の所属する学科・専攻の時間割上になく科目は、他学科履修することができる。ただし、この際の単位の取り扱い、他学科履修としての単位ではなく、正規科目の履修として共通教育科目の単位とする。
7. 英語コミュニケーション学科は、言語文化科目（日本のことばと文化ⅠA～ⅡB）に代えて専門教育科目の共通認定科目を共通教育科目の単位とする。
8. 教職課程科目（児童学科 p.i-116、117参照、児童教育学科 p.i-118、119参照、服飾美術学科 p.i-120、121参照、環境教育学科 p.i-122、123参照、造形表現学科 p.i-124、125参照、栄養学科 p.i-126、127、130参照、管理栄養学科 p.i-128～130参照、英語コミュニケーション学科 p.i-131、132参照、心理カウンセリング学科 p.i-133参照、教育福祉学科 p.i-134、135参照）のうち、\*のついた科目の単位は共通教育科目の教職課程科目の単位として、その他は卒業所要単位として算入することができる。
9. 開設学科・専攻欄に○印のついてる科目であっても、時間割上重複し、履修できないこともある。

区分	授業科目	単位数	標準開設年次				免許・資格必須別	他学科	開設学科・専攻							備考		
			1 前	2 後	3 前	4 後			児 学	児 支	環 美	表 現	栄 養	管 理	英 語		心 理	
コア科目	スタートアップセミナー-自主自律	2	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	基礎ゼミナール	2	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	開設期は学科・専攻により異なる
	キャリアデザイン	2			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	開設年次・開講期は学科・専攻により異なる
人間教育基礎科目	哲学入門	2			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	コミュニケーション論入門	2			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	子どもの世界	2			○		保育士選		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	芸術論	2			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	心理学入門	2			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	哲学	2			○		公教必											○
	心理学概論	2	○				公心師必	公教必	社福士必	精保必	認定心必							○
	コミュニケーション論	2	○				社教主選	図書必										○
	ジェンダー論に学ぶ	2			○													
	家政学原論	2			○													
	生活経営学	2			○		保育士選											
	多様な社会を生きる	2			○													
	ライフデザイン入門	2			○													
	教養としての歴史	2			○													
	社会学入門	2			○													
	経済学入門	2			○													
	日本事情	2			○													
	日本国憲法	2			○		教必	保育士選										
	日本の歴史	2			○		社教必											
	社会学	2	○				社教必	公教必	社福士必	精保必								
経済学	2			○		社教必	公教必											
家庭経営学	2	○				家教必												
女性の健康	2			○														
いのちと生活	2			○														
生命科学入門	2			○														
環境共生学	2			○														
統計学入門	2			○														
生命科学	2	○				理教必											管理のみ理教必	

区分	授業科目	単位数	必修別	標準開設年次				免許・資格必選別	他学科	開設学科・専攻							備考					
				1 前期	2 後期	3 前期	4 後期			児童 学	児童 教 育	服 装 教 育	表 現 教 育	栄 養 学	管 理 学	英 語 学		心 理 学				
人間教育 演習科目	人間と学び	人間と学び A	2	選	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○			
		人間と学び B	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○		
		人間と学び C	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		人間と学び D	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		人間と学び E	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		人間と学び F	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		人間と学び G	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		人間と学び H	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		人間と学び I	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		人間と学び J	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	人間と学び K	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	人間と学び L	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	社会と文化	社会と文化 A	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 B	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 C	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 D	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 E	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 F	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 G	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 H	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 I	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会と文化 J	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	社会と文化 K	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	社会と文化 L	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	社会と文化 M	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	社会と文化 N	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	社会と文化 O	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	自然といのち	自然といのち A	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		自然といのち B	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		自然といのち C	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		自然といのち D	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		自然といのち E	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
自然といのち F		2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
自然といのち G		2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
自然といのち H		2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
人間力育成 実践科目	実践力養成セミナー A	[2]	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	CAP 対象外	
	実践力養成セミナー B	[2]	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	CAP 対象外
	キャリア形成支援講座	2	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	CAP 対象外
	自主講座 A	[1]	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	※. CAP 対象外
	自主講座 B	[1]	選	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	※. CAP 対象外

2単位以上選択必修

CAP 対象外

※. CAP 対象外





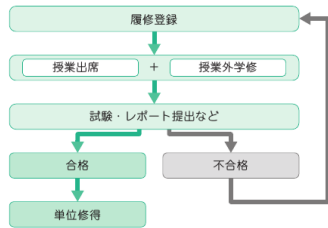


## 学修にあたって

### 単位

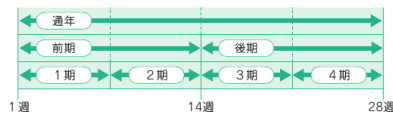
#### 単位の認定

履修登録を行ったうえで、1科目の規定授業時間数の授業出席と、単位数相当の授業外学修を行い、試験・レポートなどの成績を総合して合格と認められた者には、定められた単位が与えられる。  
【単位修得までの流れ】



#### 授業期間

1 年の授業期間を 28 週とし、これを前期及び後期の 2 期に分けて、それぞれ 14 週とする。また、前期及び後期をそれぞれ 2 期に分けた期間を 1 / 4 期 (1 期、2 期、3 期、4 期) とする。



#### 授業科目の区分

授業科目は、次のように分類される。

必修科目	卒業までに必ず単位を修得しなければならない科目
選択必修科目	卒業までに一定の科目群の中から選択し、指定された方法で必ず単位を修得しなければならない科目
選択科目	指定された科目群の中から、自由に選択して単位を修得する科目

教育課程表(看護学科は p.i-47、リハビリテーション学科は p.i-55、子ども支援学科は p.i-69 以降参照)には、必修、選択の別を「必選別」の欄に表記し、選択必修は「備考」欄に表記する。また、授業科目はその性質により、講義、演習、実験・実習及び実技に大別され、単位数欄は、講義科目は数字のみ、演習科目は [ ]、実験・実習及び実技科目は ( ) で表記する。

区分	単位数の表記方法	例
講義科目	数字のみ	2
演習科目	[ ]	[2]
実験・実習・実技科目	( )	(2)

### 学修時間

文部科学省が定める大学設置基準で「1単位は、45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とする。」とされている。

1単位を修得するために必要な学修45時間とは、**授業時間**と**授業外学修時間**を合わせた時間をさす。

$$\text{単位} = \text{授業} + \text{授業外学修} \\ \text{授業} + \text{予習・復習・課題} + \text{自主学修}$$

本学が定める**授業時間**は、授業科目の区分ごとに1単位に必要な時間数が異なる。(学則第11条より)  
●講義及び演習については、15時間の授業時間を必要とする。  
ただし、外国語、健康科学部専門教育科目の演習科目については、30時間の授業時間を必要とする。  
●実験・実習及び実技については、30時間の授業時間を必要とする。  
ただし、保育実習Ⅰ～Ⅱ及び健康科学部専門教育科目の実験及び実習については、45時間の授業時間を必要とする。

	講義科目 1 単位	演習科目 [1] 単位	実験・実習・実技科目 (1) 単位
14週 前期	15時間	(右記以外) 15時間 (外国語及び健康科学部専門教育科目) 30時間	(右記以外) 30時間 (保育実習及び健康科学部専門教育科目) 45時間
14週 後期			

注 大学では通例として授業時間45分を1時間と考えるので、1回の授業時間100分で2.2時間と考える。

**授業外学修時間**は、授業時間を「1」とした場合、次に示す割合が必要となる。授業を聞くだけでなく、より能動的・主体的に学ぶことが求められる。

区分	授業 : 授業外学修時間	例						
		授業 1 回あたりの学修時間	授業回数	単位数と学修時間				
講義	1 : 2	<table border="1"> <tr> <th>授業 (1 時間 1 回)</th> <th>授業外学修</th> </tr> <tr> <td>2.2 時間<sup>*1</sup></td> <td>4.4 時間</td> </tr> </table>	授業 (1 時間 1 回)	授業外学修	2.2 時間 <sup>*1</sup>	4.4 時間	× 14回	= 2 単位 90時間以上
授業 (1 時間 1 回)	授業外学修							
2.2 時間 <sup>*1</sup>	4.4 時間							
演習 外国語及び健康科学部専門教育科目	1 : 0.5	<table border="1"> <tr> <th>授業 (1 時間 1 回)</th> <th>授業外学修</th> </tr> <tr> <td>2.2 時間<sup>*1</sup></td> <td>1.1 時間</td> </tr> </table>	授業 (1 時間 1 回)	授業外学修	2.2 時間 <sup>*1</sup>	1.1 時間	× 14回	= 1 単位 45時間以上
授業 (1 時間 1 回)	授業外学修							
2.2 時間 <sup>*1</sup>	1.1 時間							
実験・実習・実技	1 : * <sup>*2</sup>	<table border="1"> <tr> <th>授業 (1 時間 1 回)</th> <th>授業外学修</th> </tr> <tr> <td>2.2 時間<sup>*1</sup></td> <td>* 時間<sup>*2</sup></td> </tr> </table>	授業 (1 時間 1 回)	授業外学修	2.2 時間 <sup>*1</sup>	* 時間 <sup>*2</sup>	× 21回	= 1 単位 45時間以上
授業 (1 時間 1 回)	授業外学修							
2.2 時間 <sup>*1</sup>	* 時間 <sup>*2</sup>							

注 ※1 大学では通例として授業時間45分を1時間と考えるので、1回の授業時間100分で2.2時間と考える。  
※2 [\*]と記載されている科目は、必要に応じた授業外学修を行うこととする。

## 卒業要件

本学に4年以上在学し、所定の科目を履修して所定の単位を修得し、合格と認められた者には、卒業証書と所定の学位を授ける。

### 卒業に必要な最低単位数 (看護学科)

基礎教養科目	専門教育科目	合計
28	98	126

### 卒業に必要な最低単位数 (リハビリテーション学科)

基礎教養科目	専門教育科目	合計
20	108	128

### 卒業に必要な最低単位数 (子ども支援学科)

基礎教養科目	専門教育科目	合計
24以上	90以上	124

※他学部で履修し修得した単位及び、提携大学で履修し修得した単位は、12単位を限度として基礎教養科目の単位に算入する。

## 履修登録

### 履修登録とは

履修登録とは、履修するすべての授業科目を登録する手続きのことである。学年の始めに年間受講計画を立て、原則として毎年4月の定められた期間に、その学年で履修するすべての授業科目を登録する。履修登録をしていない科目の授業に出席し、試験・レポートなどが合格と認められる成績であったとしても、その科目の単位は修得できない。手続きの詳細については別冊『履修ガイド』を参照すること。

### 履修登録できる単位数の上限 (CAP 制)

授業外学修(予習・復習・課題+自主学修)に要する時間を考慮し、履修登録できる単位数は健康科学部は年間48単位まで、子ども学部は前後期各24単位まで、年間44単位までとしており、この上限を超えて履修登録することはできない(CAP 制という)。過年で開講する科目など、各学期にまたがる科目の単位は、半数ずつ各学期の履修登録単位数に加算される。ただし、単位互換科目(本学と提携している他大学で履修した科目)、複数年次にわたって履修する科目の単位は、CAP 制の対象外とする。なお、成績優秀者に対しては、CAP 制の緩和措置を設けている(p.i-43「成績優秀者のCAP 制緩和措置」参照)。

#### 履修登録できる単位数の上限

健康科学部			子ども学部		
前期	後期	年間合計	前期	後期	年間合計
		48単位まで	24単位まで	24単位まで	44単位まで
・単位互換科目、複数年次にわたって履修する科目の単位は含まない。 ・各学期にまたがる科目の単位は、半数ずつ各学期の履修登録単位数に加算される。 (計算例) 4単位の過年科目・・・前期2単位、後期2単位					

### 履修登録科目の修正制度

#### 履修登録科目の取消

履修登録の修正は、4月の履修登録期間中はいつでも行うことができる。この期間とは別に、履修登録した科目を取り消すことができる期間を後期に設定している(後期履修修正(取消)期間という)。後期履修修正(取消)期間中に取り消せる科目は後期科目のみとし、取消合計単位数は6単位以内とする。ただし、必修科目は原則として取り消すことができない。手続きの詳細については別冊『履修ガイド』を参照すること。

#### 履修登録科目の追加

履修する授業科目は、4月の履修登録期間に、後期科目を含め年間の科目をすべて履修登録することを原則とするが、年間受講計画の変更柔軟に対応できるよう、追加登録できる期間を後期に設定している(後期履修修正(追加)期間という)。後期履修修正(追加)期間中に追加登録できる科目は後期科目のみとし、追加合計単位数は6単位以内かつCAP 制の範囲内とする。なお、4月の履修登録期間終了後に履修人数が少ない等の理由により開講中止となった科目などは追加登録できない。手続きの詳細については別冊『履修ガイド』を参照すること。

## 提携大学との単位互換制度について

本学では、学生の幅広い視野の育成と学習意欲の向上を目的として、教育学术交流のある埼玉東上地域大学教育プラットフォーム(TJUP)加盟大学と単位互換の協定を締結している。

これにより希望者は、埼玉東上地域大学教育プラットフォーム(TJUP)加盟大学から提供される単位互換科目を履修することが可能になり、単位を修得した場合は、定められた範囲内で卒業所要単位数に算入することができる。

単位互換制度に関するガイダンス、募集要項、開講科目、科目登録手続き等については学務課から随時掲示する。

## 他大学で修得した単位の認定について

学則第14条に基づき単位の認定を希望するときは、履修登録前までに必ず学務課へ申し出ること。

## 授業科目

大学において履修する授業科目は、基礎教養科目、専門教育科目に分かれる。

### 基礎教養科目

現代の社会情勢の激しい変化、多様性に対応できる判断力を育成するため、専門の枠を越えた人としての基本的な知性を涵養する。

### 専門教育科目

各学科が目ざす教育・研究目標を達成するために必要な専門の授業科目で、それぞれの専攻にとって主要な科目と、これに関連ある諸科目から成り立っている。

## 他学年履修が可能な授業科目

1. 他学年履修が可能な授業科目とは、在籍する学年以外でも履修が可能な科目である。ただし、履修者数等の関係で履修できないこともある。
2. 他学年履修ができる科目には、教育課程表の標準開設年次の学年に網かけ□の表示がされている。原則として網かけ□の表示のない科目は、他学年履修はできない。

## 他学部履修が可能な授業科目

1. 在籍する学部以外の他学部の共通教育科目の中から履修(以下「他学部履修」という)し、単位を修得することができる。
  2. 修得した単位は卒業に必要な単位として認め、基礎教養科目の単位として参入する。
- 他学部履修が可能な共通教育科目及び履修登録に必要な手続き等については、学務課から随時掲示する。



# データサイエンスの視点で “自分なり”の考えへ

## 家政学部

1人1台端末時代に教育データを活用した幼児、児童、生徒の個性の育成  
アートとサイエンスの融合からひとと社会をつなげる生き方のデザイン  
コンシューマーデータサイエンス：  
消費者データを活用して販売傾向や商品デザインの予測

## 栄養学部

ヘルスデータサイエンス：  
栄養データを活用して食と健康を考える人間栄養学の展開  
コンシューマーデータサイエンス：  
消費者データを活用した商品開発や販売傾向の予測

## 人文学部

広い視点から様々なデータを分析  
多様なところのあり方と向き合うためのデータ活用  
グローバルワイドな英語教育データの活用  
社会と社会をつなげるコミュニケーション力の向上  
福祉社会データをもとにした福祉施策のデザインと実行

## 健康科学部

ヘルスデータサイエンス：  
臨床現場のヘルスデータの分析と解釈  
個別化医療への取り組みや保険医療施策の検討  
専門教育での学修：  
概念（ヘルスデータサイエンス）と  
知識（統計の基本）

## 子ども学部

子ども一人ひとりの特性や行動、生活環境などの分析  
幼児教育・保育や特別支援教育への活用

データをもとに新しいアイデアを創る

# データサイエンス基礎

令和4年度より、学部・学科を問わず分野横断的にデータサイエンスに関する教養を身につける科目「データサイエンス基礎」を新たに開設します。全学部・全学科共通に、1年生を対象として夏期集中開講フル・オンデマンド形式のメディア授業です。

データサイエンスの視点を活用し、社会におけるさまざまな事象を適切に読み解く力を身につけ、さらには“答えのない課題”に対して最善な解につながる思考力や解決力を養うことを目指します。

令和4年度の「認定教育プログラム」が円学部等  
に開講されていることが分かる資料-3  
令和4年度「データサイエンス基礎」リーフレット

# 3つの特徴



(東京家政大学初のキャンパス横断科目)  
板橋・狭山の両キャンパスの学生が履修可能なフル・オンデマンド形式のメディア授業です。自分のペースで学ぶことができます。



すべての学部・学科の学生が学びやすい内容になっています。初心者でも安心して取り組むことができます。



プログラム修了（「データサイエンス基礎」の単位修得）により、本学認定の「修了証書」を発行。就職活動に役立てることができます。

## 履修登録方法

(注意) 通常の科目とは履修登録の仕方が大きく異なります。下記の手順で履修の希望申請からはじめてください。

- ①履修希望登録 東京家政大学ポータルで別途案内する手順に従い、プログラム受講を希望する場合は履修希望登録期間（4月22日～5月13日）内に、登録を行ってください。
- ②履修確定 5月中旬に履修が決定した方を対象に、プログラム受講の連絡を行います。  
※履修希望者多数の場合は、抽選により受講者を決定する場合があります。
- ③授業開講 本プログラム科目「データサイエンス基礎」は夏期集中期間（8月22日～9月7日）に実施されます。全14回の講義はオンデマンド配信されますので、受講学生は、すべての動画を視聴し各回ごとの課題を期間中に提出してください。

## 単位の取り扱い

- 【板橋キャンパス】 共通教育科目の「情報関連科目」として「情報活用（必修科目）」の履修に加えて「データサイエンス基礎（選択科目・2単位）」を履修することができます。修得した単位は「共通教育科目」の単位として卒業単位に含まれます。
- 【狭山キャンパス】 他学部履修として「データサイエンス基礎（選択科目・2単位）」を履修します。修得した単位は「基礎教養科目」の単位として卒業単位に含まれます。

プログラム詳細はHPをご確認ください。また、ご不明点は窓口にお問い合わせください。

お問い合わせ 共通教育推進室（板橋キャンパス・100周年記念館1階）

TEL 03-3961-5624

Mail jyoho-jimu@tokyo-kasei.ac.jp

URL [https://www.tokyo-kasei.ac.jp/academics/educational\\_info/mdack.html](https://www.tokyo-kasei.ac.jp/academics/educational_info/mdack.html)

詳細はコチラ



**プログラムを改善・進化させるための体制-1**  
**全学データサイエンス教育推進委員会規程**

全学データサイエンス教育推進委員会規程

令和5年3月31日制定

(設置)

第1条 全学運営会議規程第9条に基づき、全学運営会議に全学データサイエンス教育推進委員会（以下、「委員会」という。）を設置する。

(目的)

第2条 本委員会は、数理・データサイエンス・AIへの学生の関心を高め、かつ、数理・データサイエンス・AIを適切に理解し、それらを活用する基礎的な能力及びそれらを活用して課題を解決するための実践的な能力を育成することを目的とする。

2 本委員会は、全学の学生を対象とした数理・データサイエンス・AIに関する体系的な教育を行うために必要な事項を審議し、その教育の管理・運営を担う。

(構成)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 全学運営会議構成員から指名された者
  - (2) 数理・データサイエンス・AI教育プログラム（以下、「本プログラム」という。）の授業科目を担当する教員から指名された者
  - (3) その他委員会が必要と認める者
- 2 前項第1号の委員は、学長が指名、委嘱する。
- 3 前項第2号から第3号までの委員は、委員長と学長の協議のうえ、学長が指名、委嘱する。

(任期)

第4条 前条第1項第2号から第3号までの委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(審議事項)

第5条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 本プログラムの管理・運営に関すること。
- (2) 本プログラム基幹科目としてのデータサイエンス基礎のカリキュラムに関すること。
- (3) 本プログラムの自己点検・評価及び改善・進化に向けた取り組みに関すること。
- (4) 本プログラムの履修者数・履修率の向上に関すること。
- (5) 文部科学省へのプログラム認定申請に関すること。
- (6) その他本プログラムに関すること。

(委員長)

第6条 委員会に委員長を置き、第3条第1項第1号の委員をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(開催)

第7条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(代理出席)

第8条 委員がやむを得ない事情により会議に出席できないときは、代理の者を出席させることができる。

(委員以外の者の出席)

第9条 委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(報告)

第10条 議長は委員会で審議した事項をとりまとめ、全学運営会議に報告する。

(事務)

第11条 委員会の事務は、共通教育推進部が所轄する。

(規程の改正)

第12条 この規程の改廃は、全学運営会議の議を経て、学長が決定する。

(雑則)

第13条 この規則に定めるもののほか、委員会について必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

1 この規則は、令和4年12月8日から施行する。

2 第4条の規定にかかわらず、令和5年3月31日時点の委員の任期は、令和5年9月30日までとする。

全学運営会議議題

令和4年12月8日

学長

## 全学データサイエンス教育推進委員会の設置

### 【目的】

学生の数理・データサイエンス・AIへの関心を高め、かつ数理・データサイエンス・AIを適切に理解し、それを活用する基礎的な能力を育成すること及び数理・データサイエンス・AIを活用して課題を解決するための実践的な能力を育成することを目的として、東京家政大学において、全学の学生を対象として数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術について体系的な教育を行うために、全学データサイエンス教育推進委員会を設置する。

第1段階として、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の認定を受けることを目標とする。

### 【第1段階・内容】

- 「東京家政大学 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」基幹科目としてのデータサイエンス基礎のカリキュラム検討
- カリキュラムの点検・評価・改善
- クラス数、開講時期などの学内調整
- 認定制度申請（令和5年5月申請予定）
- 学生への履修広報活動
- 修了証のデジタル発行（オープンバッジ）システム導入

### 【第1段階・委員】

大西淳之（委員長）、天野美穂子、小池新、保坂遊、神保正典（申請アドバイザー）  
事務局は共通教育推進部

### 【第1段階・任期】

令和5年9月30日まで

全学運営会議議題

令和4年12月8日

学長

### 全学リベラルアーツ教育検討特別委員会の終了

全学リベラルアーツ教育検討特別委員会は、板橋・狭山両キャンパスの学部を超えた全学的な情報教育科目の検討開始を目的として、令和2年度第8回全学運営会議（令和2年10月8日開催）において設置された。現在までのところ、今年度第8回全学運営会議（令和4年11月10日開催）の議題2で説明された通り、所期の目的達成に向けた活動は、当該委員会の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」分科会によって進められている。そこで、以下のとおり提案する。

1. 全学リベラルアーツ教育検討特別委員会を終了し、準備が整い次第、本学に必要な新しい全学共通教育体制を企画・設計する委員会をあらためて設置する。
2. 「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」分科会を、全学データサイエンス教育推進委員会として設置しなおす。

以上

## 全学運営会議規程

(令和元年5月29日)

最近改正 令和3年4月1日

(設置)

**第1条** 東京家政大学び東京家政大学短期大学部に全学運営会議を置く。

(目的)

**第2条** 全学運営会議は、全学にわたる教育・研究を遂行するための、全学的な方針の策定に関する事項について審議を行う。

(構成)

**第3条** 全学運営会議は、次の各号に掲げる者をもって構成する。

- 一 学長
- 二 短期大学部学長
- 三 副学長
- 四 学部長、研究科長
- 五 図書館長
- 六 教育支援センター、学生支援センター、アドミッションセンター、学修・教育開発センター、共通教育推進室、教職センター、狭山学務部の長

(審議事項)

**第4条** 全学運営会議は次の各号に掲げる事項を審議する。

- 一 教育・研究の全学的な方針の策定に関する事項
  - イ 教育・研究上の将来計画・ビジョン
  - ロ 教育・研究体制の改善・運営等
  - ハ 教育・研究に関する環境整備（研究費等含む）
- 二 教育課程の編成
- 三 教員人事の全学的な方針の策定に関する事項
  - イ 教員人事計画
  - ロ 学長指名役職者等
  - ハ その他必要と認められる事項
- 四 全学的な方針の策定に関する学則および諸規程の制定と改廃
- 五 その他、全学的な方針の策定に関する管理運営事項

(招集および議長)

**第5条** 学長は全学運営会議を招集し、その議長となる。

- 2 学長は代理の議長を指名することができる。
- 3 議長は必要に応じて第3条以外の教職員を全学運営会議に出席させることができる。



(開 催)

**第6条** 全学運営会議は原則として毎月1回これを開く。

2 学長が必要と認めたときは臨時にこれを開くことができる。

(議 決)

**第7条** 全学運営会議が議決を要するときは、構成員の3分の2以上の出席で、過半数の同意を得なければならない。

(議案の決定)

**第8条** 全学運営会議の議案は学長が定め、招集の際あらかじめ全学運営会議構成員に通知することを原則とする。

(特別委員会)

**第9条** 審議事項のうち集中的に検討する必要がある事項について、全学運営会議に、特別委員会（以下、「委員会」という。）を置くことができる。

2 全学運営会議は、委員会に、一定事項の調査、協議立案などを諮問する。

3 委員会で審議した事項は、全学運営会議に報告しなければならない。

4 委員会の委員長は、構成員のうちから学長が指名、委嘱する。

5 委員会の委員は、学長が指名、委嘱する。

(事 務)

**第10条** 全学運営会議及び委員会の事務は、教育支援センターにおいて行う。

(規程の改正)

**第11条** この規程の改廃は、全学運営会議構成員の3分の2以上の同意を得て学長が決定する。

(補 足)

**第12条** この規程に定めるもののほか、全学運営会議に関し、その他必要な事項は別に定める。

#### 附 則

この規程は、令和元年5月29日から施行する。

#### 附 則

この規程は、令和元年11月27日から施行する。

#### 附 則

この規程は、令和3年4月1日から施行する。

## 全学データサイエンス教育推進委員会規程

令和5年3月31日制定

### (設置)

第1条 全学運営会議規程第9条に基づき、全学運営会議に全学データサイエンス教育推進委員会（以下、「委員会」という。）を設置する。

### (目的)

第2条 本委員会は、数理・データサイエンス・AIへの学生の関心を高め、かつ、数理・データサイエンス・AIを適切に理解し、それらを活用する基礎的な能力及びそれらを活用して課題を解決するための実践的な能力を育成することを目的とする。

2 本委員会は、全学の学生を対象とした数理・データサイエンス・AIに関する体系的な教育を行うために必要な事項を審議し、その教育の管理・運営を担う。

### (構成)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 全学運営会議構成員から指名された者
  - (2) 数理・データサイエンス・AI教育プログラム（以下、「本プログラム」という。）の授業科目を担当する教員から指名された者
  - (3) その他委員会が必要と認める者
- 2 前項第1号の委員は、学長が指名、委嘱する。
- 3 前項第2号から第3号までの委員は、委員長と学長の協議のうえ、学長が指名、委嘱する。

### (任期)

第4条 前条第1項第2号から第3号までの委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (審議事項)

第5条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 本プログラムの管理・運営に関すること。
- (2) 本プログラム基幹科目としてのデータサイエンス基礎のカリキュラムに関すること。
- (3) 本プログラムの自己点検・評価及び改善・進化に向けた取り組みに関すること。
- (4) 本プログラムの履修者数・履修率の向上に関すること。
- (5) 文部科学省へのプログラム認定申請に関すること。
- (6) その他本プログラムに関すること。

(委員長)

第6条 委員会に委員長を置き、第3条第1項第1号の委員をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(開催)

第7条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(代理出席)

第8条 委員がやむを得ない事情により会議に出席できないときは、代理の者を出席させることができる。

(委員以外の者の出席)

第9条 委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(報告)

第10条 議長は委員会で審議した事項をとりまとめ、全学運営会議に報告する。

(事務)

第11条 委員会の事務は、共通教育推進部が所轄する。

(規程の改正)

第12条 この規程の改廃は、全学運営会議の議を経て、学長が決定する。

(雑則)

第13条 この規則に定めるもののほか、委員会について必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

1 この規則は、令和4年12月8日から施行する。

2 第4条の規定にかかわらず、令和5年3月31日時点の委員の任期は、令和5年9月30日までとする。

# 全学共通科目「データサイエンス基礎」取組概要

## 本科目の到達目標

- (1) データサイエンスに関する基礎的な概念を理解し、社会における実際のデータ・課題を適切に読み解くことができる。(導入)
- (2) データを利活用する上で必要な倫理面での留意事項を理解することができる。(心得)
- (3) データの基礎的な分析方法を知り、活用することができる。(基礎)

## 本科目の特徴

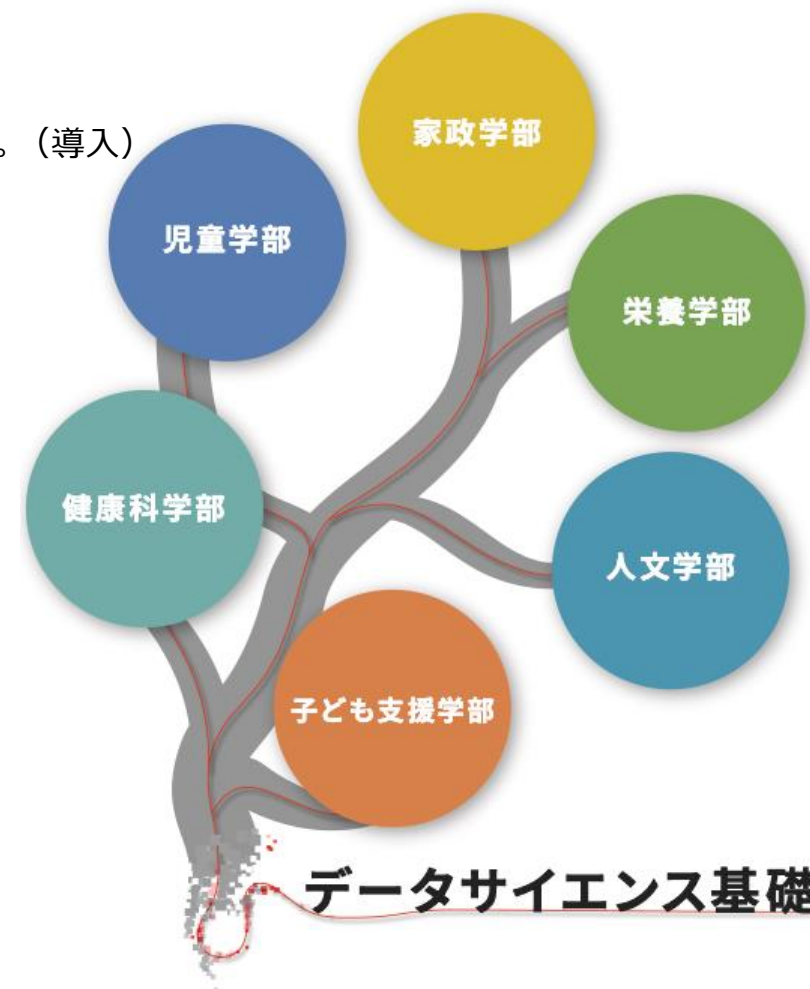
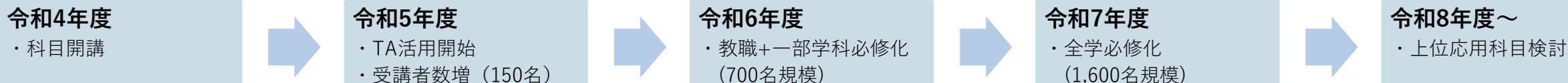
- (1) フル・オンデマンド形式のメディア授業とし、開講期も他科目と被りのない集中講義期間に設定。  
受講方法・受講時期の双方から履修しやすい科目設計。
- (2) 初学者でも学びやすい内容として教員による毎年紹介動画・動画教材の作成・活用。  
LMSによる進捗管理・適切な介入の実施と、学生が確実に学びを身につけられるフォロー体制の整備。
- (3) 本学認定の「修了証」の発行による学生の履修促進とともに能力証明として就職活動等への活用。

⇒各学科の専門性を支える全学部・学科の学びに活用できる内容として設置。右記の概念図も作成し、本科目が各学部の専門性へつながるよう設計。

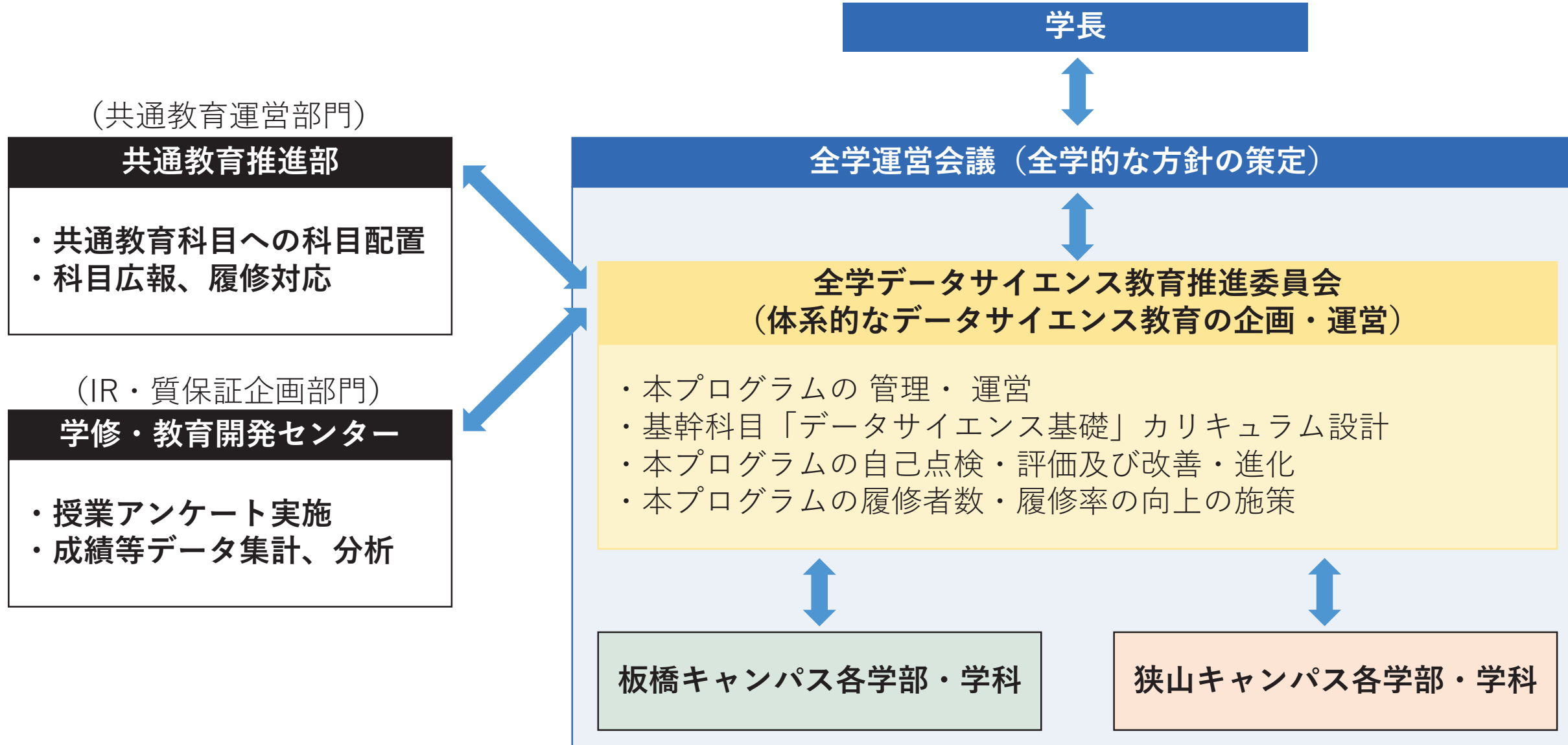
## 令和4年度自己点検を踏まえた検討事項

- (1) ゲストスピーカーや学生の専門性を考慮した事例紹介等の拡充
- (2) 学生の総合的な理解度把握のための、LMS利用の拡充、自動採点+記述テストの充実

## 今後の計画



## 補足説明資料（学内運営体制）



## 補足説明資料（科目運営体制）

【教員】異なる専門を持つ教員、実務家教員等  
計3名にて担当

- ・ 学生の授業進度確認
- ・ 課題提出確認・評価
- ・ LMSによる質疑応答

【TA】データや統計の扱える大学院生が担当  
（令和5年度より）

- ・ 学生の個別相談対応（対面・LMS）
- ・ 教員の授業運営補助

### 履修者

【事務部門】

- ・ 共通教育推進部  
履修案内・対応、学内広報、科目運営補助
- ・ 学修・教育開発センター  
LMS相談対応、データ収集・フィードバック

【ゲストスピーカー】企業経験者、学外専門家等

- ・ 社会におけるデータの役割・活用事例を紹介、  
授業から実社会へのイメージをつなげる
- ・ 産業界、アカデミア双方の視点からの改善  
フィードバック